

今昔物語は、平安時代後期の物語集ですが、かなで書かれた和文ではなく、男文字である漢字を使って漢文風に書かれたものです。漢文学習者にとってはよく見る漢字でもあり、和文より却って読みやすい面もあるのではないのでしょうか。

今昔、播磨の安高と云ふ近衛舎人有けり。右近の将監貞正が子也。法建院の御隨身みずしんにてなむ有けるが、未だ若かりける時、殿は内裏おわしに御ましけるあいだに、安高が家は西の京に有ければ、安高、内に候ひけるが、従者の見えざりければ、西の京の家へ行くとして、只独り内通りに行けるに、九月の中の十日許の程なれば、月極つきく明きに、夜うちふけて、宴の松原の程に、濃うき打たる柏かしわに、しをに色の綾あやに柏重ねて着たる女の童の、前に行く様体・頭つき、云はむ方無く月影に映えて微妙めいめうし。安高は、長き沓くつを履てこそめき行くに、歩あび並て見れば、絵書たる扇あふぎを指隠さしかくして、顔を吉くも見せず。額・頬などに、髪ひねり懸たる、云はむ方無くいつくしげ也。安高、近く寄て触這ふれぼうに、薰の香極いみじく聞ゆ。「此く夜深更たるに、何れの御方の人の何こへ御するぞ」と、安高云へば、女、「西の京に人の呼べば行く也」と答ふ。安高、「人の許へ御せむよりは、安高がりいぎ給へ」と云へば、女、咲えみたる音にて、「誰と知てかは」と答ふる、極く愛敬付たり。此く互に語り行く程に、近衛の御門の内に歩あび入ぬ。

安高が思ふ様、「豊楽院の内には、人謀たばかる狐有、と聞くぞ。若し此れは、然にもや有らむ。此奴恐おどして試む。顔をかほつとぶと見せぬが怪きに」と思て、安高、女の袖を引へて、「此に暫し居給へれ。聞ゆべき事有り」と云へば、女、扇を以て顔に指隠さしかくしてかかやくを、安高、「実には、我れは引剥ひきかぞ。しや衣剥てむ」と云ふまゝに、紐ひもを解て、引編ひきかたぬきて、八寸許の刀の凍こほりの様なるを抜きて、女に指宛さしあてて、「しや吭搔切のんかききりてむ」と、「其の衣奉れ」と云て、髪を取て、柱に押付て、刀を頸に指宛さしあてつる時に、女、kana 艶うらみえもいはず臭くき尿を、前に散ちと馳懸ちかく。其の時に、安高、驚おどて免まず際ぎはに、女、忽たちに狐に成て、門より走り出で、こうこうと鳴て、大宮登おおみやのぼりに逃にて去ぬ。安高、此れを見て、「『若し人にや有らむ』と思てこそ、殺さざりつれ。此く知りたらましかば、必ず殺てまし」と、妬ねたく悔くしく思えけれども、甲斐無くて止にけり。

其後、安高、夜中暁と云はず、内通りに行けれども、狐懲こにけるにや、

1 傍線は読解に役立つ重要語。数字は読解で意識するポイント。よくお目にかかる文字・読み。

例 其こそ、この、かく
此こそ、この、かく
然しか、しか
彼か、かの、
也なり

云いう、いわく
漢字の送り仮名・読みも本則でない。読みがわからない場合は文脈で読もう。(岩波文庫版利用)

2 近衛・このえ・こんえ警備担当、舎人・とねり下級役人。

3 大内裏を横切つて

4 濃い紫で砵びで打ちつやを出した柏(あこめ)下着の上に着る

5 こそぞ音を立てて

6 近くに触れるほどに身を寄せて行くと。無遠慮な行動。

7 誰とも知りませんのに

8 貴族の女性が顔を見られないようにするのが当たり前だったこの時代に、顔を隠すのが不審だと、どういうことだろうか。

9 恥ずかしがる

10 手を離れた途端

更に値はぎりけり。狐、微妙めうたき女と変じて、安高をすかさむと為る程に、¹¹希有の死を為ずしてなむ有ける。

¹¹ 死なずに済んだのは
運が良かった。

然れば、人遠からむ野なむどにて、独り間に、吉よき女などの見えむをば、広量して触這ふまじき事也。此れも、安高が心ばへの有て、女に強に耽らずして、すかされぬ也となむ語り伝へたるとや。

問1 安高は近衛舍人という警護・護衛などをする下級役人であり、古文で学習した平安貴族の常識とは少し違った庶民寄りの世界を見ることが出来る。どのように違うのか説明せよ。